

日本語学会第 152 回大会発表要旨

The 152nd Meeting of the Linguistic Society of Japan
Abstracts of Oral presentations and Workshops

期 日：2016 年 6 月 25 日（土）・26 日（日）

会 場：慶應義塾大学三田キャンパス

〒108-8345 東京都港区三田

Dates: June 25-26, Sat.-Sun., 2016

Venue: Keio University, Mita Campus

Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345, Japan

第 1 日（6 月 25 日）

13:00–17:40 口頭発表（西校舎 1 階，2 階）

第 2 日（6 月 26 日）

10:00–12:00 ワークショップ（西校舎 1 階）

13:40–16:50 公開シンポジウム（西校舎 1 階 517 教室）

Day1

13:00 - 17:40 Oral presentations

(1st and 2nd floors of West School Building)

Day2

10:00 - 12:00 Workshops (1st floor of West School Building)

13:40 - 16:50 Symposium (Room 517, West School Building)

■口頭発表（6月25日（土） 13:00—17:40）

[A-1]

Japanese derivational morphology and root-based syntax

Brent DE CHENE

Proposals that paired intransitive and transitive verb stems in Japanese (*nao-r-*, *nao-s-*) are syntactic constructions of root plus little *v* (Volpe 2005, Marantz 2013) rest only on comparison of the verbal stems themselves, so that each stem contains precisely one suffix. Reference to stems of other categories shows that a minority of verb stems include two transitivity-determining suffixes (*yuru-* (adj.), *yuru-m-*, *yuru-m-e-*; *nezi* (noun), *nezi-r-*, *nezi-r-e-*). In contrast with the behavior of uncontroversially syntactic elements, an outer transitivity suffix must be taken to render an inner one inert for semantic interpretation and argument structure, calling into doubt the syntactic status of the suffixes. Two further arguments against the syntactic generation of verb stems are presented, and alternative accounts are surveyed.

[A-2]

Saying in a hidden way

Hiroaki SAITO

This talk examines the morpheme *-teki* ‘like’ in Japanese. In colloquial speech among young generations, *-teki* can appear in relative clauses (*-teki* relatives).

- (1) okaasan-ga tuku-tta teki-na karee
 mother-Nom cook-Past TEKI-Cop curry
 ‘the curry like the one the mother cooked’

In (1), *-teki* takes a sentential complement. I will show that *-teki* relative is syntactically different from unmarked relative clauses. Rather, it behaves as if it is a clausal complement of a specific class of verbs, represented by *say*. I will propose that there is actually a verb like *say* in the syntax of *-teki* relatives. I will also suggest that the proposed analysis can be extended to the so-called complementizer *toiu*, which usually appears in (pure) complex NPs.

[A-3]

On the particle *Zhi* in Old Chinese

Yong-Xin GAO, Megumi HASEBE, Ying BI, Can WANG, Wen-Qi REN, Chun-Zhu HUO,
Michael SEVIER, Hideki MAKI

Maki et al. (2015) claim that modern Chinese allows genitive subjects, although the grammaticality judgments of genitive subjects vary from speaker to speaker. The genitive subject marker in modern Chinese is *de* ‘Gen’ (的) for those who accept genitive subjects. However, a careful survey of old Chinese literature shows no instance of this particle as a genitive subject marker. The purpose of this paper is then to investigate whether old Chinese allows genitive subjects. Based on the data we collected, we will claim that it does allow genitive subjects with another particle *zhi* (之) ‘Gen,’ and that the distribution of genitive subjects in old Chinese is fundamentally parallel to that of genitives subjects in old Japanese.

[A-5]

中国語の正反疑問文に見られる干渉効果について

石井 友美, 伊藤 さとみ

現代中国語において、述語の肯定形と否定形を重ねる疑問文のことを正反疑問文という。この疑問文は、“只(～だけ)”, “也(～も)”, “都(すべて)”, “静静的(静かに)”など、多くの副詞と共起することができない。本発表では、この現象について、正反疑問部分に焦点が固定されるため、その他に焦点を指定する副詞と相性が良くないからであると説明する。まず、正反疑問文は、通常 *yes/no* 疑問文と同じく、肯定命題と否定命題からなる集合と定義される。次に、正反疑問文に出現できない副詞は、焦点敏感演算子 (focus sensitive operator) であり、その解釈において代替集合を必要とすることを示す。よって、副詞の解釈を行う際、正反疑問文の与える命題の集合をもとに代替集合を作ることになり、解釈は不可能となる。最後に、通常 *選択疑問文* 一般に見られる干渉効果 (intervention effects) と異なる点についても考察する。

[A-6]

動詞重複を伴う中国語の動詞（句）移動について

星 英仁, 胡 亜敏

Cheng & Vicente (2013)は中国語の $[V_i...是...V_i]$ 構文において統辞部門(NS)でVが文頭の話題化位置に移動し、Vのコピーが発音されることによって動詞重複が生じると主張している。本発表では、Cheng & Vicenteの分析を拡張し、VだけではなくVPも文頭の話題化位置に移動できることを示し、 $[V_i...是...V_i]$ 構文に見られる動詞重複の統辞的メカニズムについてより詳細な提案をおこなう。動詞重複の可能な連鎖は $[V_i...是...V_i]$, $[V_i...是...V_i NP]$, $[V_i NP...是...V_i]$ であり、元位置の目的語NPは重複することができない。これはVPがNSで移動する場合、PFで元位置にあるVP全体がPFで削除されるものの、元位置のVがVP削除の前にAspPの主要部へ移動することによって削除操作の適用を逃れ、動詞が重複して生起すると説明できる。またVのみが文頭に生起する場合、音形を持たない代名詞である*pro*を伴ったVP全体が移動する場合とVのみが移動する場合があることを論じ、動詞移動にはNSとPFで生じる2種類のタイプが存在することを示す。

[A-7]

漢語福清方言の受身構文に関する一考察

陳 学雄

漢語福清方言は中国福建省東南沿岸地域の福清市及び平潭県の一部で使用される言語である。系統的には漢語閩東方言の下位方言として位置づけられる。本発表では福清方言の受身構文の初歩的な考察を行う。

福清方言の他動詞を用いた能動文は“ N_A (動作主)+V+ N_P (対象)”の語順を取る。これに対し、“ N_P + 乞 + N_A +VR(動詞補語)”の構文が存在する。後者の構文を本言語の「受身構文」と認定する。この時 N_A の生起は義務的である。この2構文に加え、対象名詞句を移動した“ N_P + N_A +V”もある(以下、「主題化構文」と呼ぶ)。

上記の3構文は述語動詞の種類や名詞句の有生性により分布に偏りがある。例えば、述語は単純動詞ではなく、VRの場合では、「受身構文」と「主題化構文」は適格となるが、能動文は不適格となる。また、 N_A が[-有生]の時は「受身構文」のみが適格となる。

以上のほか、動詞に意図性を付与する“ 掏 ”を用いた述語との関係や、自動詞による受身構文の存在を指摘する。

[B-1]

日本語壁塗り構文「塗る」の分析

深谷 修代

本研究発表では、日本語の壁塗り構文を取り上げ、動詞「塗る」の特性を追求する。『広辞苑』など 17 の辞典を用いて、4 つのパターン(タイプ A: 壁にペンキを, タイプ B: 壁をペンキで, タイプ C: 壁を, タイプ D: ペンキを)が可能か調べた結果、タイプ B は 4 つの辞典のみで記載されていることがわかった。青空文庫の全作品を対象として、「塗る」を伴うデータを収集したところ、タイプ A が 232 例、タイプ B が 46 例、タイプ C が 112 例、タイプ D が 128 例観察され、タイプ B の頻度が極めて低いことが示された。タイプ D は、近くにニ格に相当する要素が明記されているか、移動物が特定できる場合に限定されるため、「塗る」は元来、タイプ A を要求し、限定的にタイプ D が可能であると主張する。タイプ C では、デ格に相当する移動物が近くに明記されている事例はわずかだったことから、タイプ C が基底構文で、移動物が必要なときにタイプ B が生成されると主張する。

[B-2]

目的語主格構文と能格構文の平行性

菅野 悟

本発表では、生成文法(Chomsky 2000 以降)の枠組みで、対格言語(accusative language)の主格目的語構文(nominative object construction)と能格言語(ergative language)の能格構文(ergative construction)の類似性を捉えることである。

本発表では、主格目的語構文と能格構文は同一の派生を有すると提案する。この提案から直ちに生じる帰結が 2 点ある。まず、能格性は対格性と対立する概念ではなく、すべての言語は普遍的に対格言語である。次に、「能格」言語は段階性を示すことになる。

さらに、この提案により、主格目的語構文の多様性は、「能格性」の多様性と並行的であることが予測される。本発表では、ゲルマン語派とインド・アーリア語派を取り上げ、この予測が適切であることを示す。

[B-3]

いわゆるラ抜き言葉の形成における形態統語的制約について

高橋 英也, 江村 健介

「上げれる, 建てれる」のような, いわゆるラ抜き言葉については, これまで, 主として社会言語学や方言文法といった枠組みにおいて, 様々な観察・分析がなされ, 豊かな知見が蓄積されてきた。他方, そういった非規範的な「ラ抜き」を容認する話者にどのような文法的メカニズムが備わっているのか, という観点からの議論は, 皆無に等しかった。

本発表では, 先行研究においてたびたび指摘されてきた, ラ抜きが適用される動詞の音節数の問題に着目し, 実際には, それが, ラ抜き言葉の形態統語的性質に由来する, 「見せかけの」一般化であることを論じる。特に, 筆者が実施した, ラ抜き言葉の容認性に関する質問紙調査の結果, および, それに対する分析と考察を提示し, ラ抜き言葉の形成可能性が, 動詞の自他交替における形態的示唆性と相関することを明らかにする。

[B-4]

日本語の命令文における主題化空主語の認可について

野口 雄矢

本発表では, 日本語の命令文において通常音声形式を伴わずに表される 2 人称の主語が, 音声形式を伴い, ハで標示された主題句 (e.g., 君は書類を片付けろ) を「主題化空主語」と呼ぶ。先行研究 (e.g., 上田 2007, 長谷川 2012) の分析をもとにすると, 当該の主題句は, 間接引用であるト節の内部に生起することができると予測されるが, 本発表ではこの予測に反するデータを提示し, 当該の主題句の認可には先行研究での分析以上のプロセスが必要であることを主張する。

具体的には, 堀川 (2010) における日本語学の観点からの分析をもとに, 当該の主題句は「呼びかけ (Vocative)」に関する素性 [vocative] を有し, また, Haegeman and Hill (2014) の分析をもとに, 語用論的概念が関与する Speech Act Phrase (SpAP) (cf. Speas and Tenny 2003) の主要部が [vocative] を有すると想定し, 当該の主題句はそれらの素性間での一致により認可されると主張する。この分析は, 日本語の統語構造において, ForceP (および RportP) より上位に SpAP という機能範疇が存在することを支持するものとなる。

[B-5]

日本語における無助詞の機能と私的・公的表現性

山田祥一, 並木 翔太郎

本発表は、日本語における主語名詞句に助詞を伴わない事例（以下、無助詞）を考察対象とし、その機能的特徴を明らかにする。先行研究（長谷川 1993, 加藤 2003, 高見・久野 2006 他）では、無助詞が話し言葉で観察されることから、聞き手の存在を前提とする発話が分析の中心であった。本発表は、私的・公的性という話し手の二面性にに基づき（Hirose 1995 他）、無助詞は意識抽出の独り言でも観察されることから（Hasegawa 2006）、本来的に伝達を意図しない私的表現であると仮定する。そして、無助詞には「当該名詞句の指示対象が眼前にあるかの如く、且つ、他の指示対象を参照せずに概念化する」ことを表出する機能があると主張し、(i) 無助詞が対比・総記解釈を持たないこと、(ii) イ落ち構文において無助詞のみが選択されること、(iii) 聞き手への談話的効果が適切に導かれることから、本発表の主張の妥当性を示す。

[B-6]

日本語の新聞の論説記事と投書文におけるメタディスコース研究

金沢 じゅん

本研究は、書き手の主張を文章として組み立てたり、書き手が読み手との関係を築くために用いる言語表現である Hyland (2005a, 2005b) のメタディスコース (metadiscourse) の 14 の分類に基づいて、日本語の『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』の新聞の論説記事と投書の文章のメタディスコースの使用傾向を明らかにした。分析の結果、論説記事と投書ともに、命題間の論理関係を示す Transition markers, 他者からの情報源を示す Evidentials, 書き手の主観性や配慮を示す Hedges, 強調表現の Boosters, 情緒的表現である Attitude markers というメタディスコースが多く用いられていた。一方で、論説記事と投書の差異に着目すると、投書では、書き手自身を示す Self-mentions が論説記事よりも多く用いられていた。本研究では、さらに、文章の説得力に関わる Hedges と Boosters のメタディスコースに着目し、どのような日本語の言語表現が実際に Hedges や Boosters として新聞の論説記事や投書の中で用いられているのかを明らかにした。

[B-7]

修道院手話「手まね」の疑問表現

柴田 香奈子

本発表では、修道院手話「手まね」の疑問表現について、手話言語学的視点から分析を行い、その特徴について考察する。ドイツなどの当該修道院でフィールドワークを実施した結果、「手まね」の疑問表現から以下の特徴が観察された。

- ① 3次元的に示される Wh 疑問文
- ② Yes/No 疑問文に見られる語彙範疇から機能範疇への「文法化」
- ③ 単なる単語の羅列ではない、合理的な語順

①肩とあごを上げる非手指表現と動詞を示す手指表現が、同時に3次元的に表された。②元々は「奉公する」という意味の単語が、本来の意味を失い質問マーカーとして使用されていた。つまり、語彙範疇から機能範疇への「文法化」と考えられる。③「手まね」の語順は、これまで音声言語に沿って単語を並べただけと考えられてきた(Barakat 1975)が、音声言語の語順とは異なる、一つの情報を経済的かつ合理的に伝えられるルールが観察された。

本発表では、これらの特徴について具体的な例を示し検討を行う。

[C-1]

フランス人日本語学習者における「ウ」の発音について

ギユモ・セレスト

日本語の「ウ」音 (IPA[w]) におけるフランス人日本語学習者の発音には母語干渉が見られ、フランス語の「ou」 (IPA[u]) と「u」 (IPA[y]) として発音されることが多い。本研究では (1) フランス人日本語学習者は /w/ をフランス語のどの母音で発音する傾向が見られるのか、(2) 日本語習熟度によってそれがどう変化するのかを音声タスクを用い、調査する。学習者の産出を検討した結果、初級者は /w/ を [u] や [y] として発音することが多く、中級でも同様の傾向が見られたが、上級では正しく発音されていることが分かった。本研究の結果は、初級・中級者の場合、範疇化がまだ完成しておらず、習得が出来ていないことを示唆している。また、上級学習者は日本語の[w]を習得していると言える。

[C-2]

日本語母語話者と日英バイリンガル児童のモダリティ習得について

甲斐 ますみ

日本語学習者を対象としたモダリティ形式の産出や誤りについてはこれまで数多くの研究がなされてきている。しかし管見の限り、日本語母語話者やバイリンガル児童のモダリティ習得についてはまだ十分な研究は行われていないと言える。本発表では1;1歳から9;4歳までの、日本語母語話者6人と日英バイリンガル児童3人を対象とした縦断的調査によって得られた自然発話データを用い、1)モダリティの習得年齢、2)モダリティの習得順序、3)特異なモダリティ形式「だろー」、の三点について議論する。結果から、日本語母語話者は本発表で提示する習得順序で、大体5歳頃までに多くの主要なモダリティ表現を習得・産出すると想定できる。ただ、年少で英語環境に置かれたバイリンガル児童は「だろー」に特異なケースが見られた。また英語がより優勢なバイリンガル児童はモダリティ形式の使用が少なくなり、裸の命題の形式で文を終わらせる割合が増えた。

[C-3]

日本人英語学習者によるガーデンパス文の処理

—自己ペース読文実験による検討—

津村 早紀, 峰見 一輝, 矢野 雅貴

本研究では、第二言語として英語を学習している日本人が、大人の英語母語話者のように意味的情報や動詞の下位範疇化情報を利用してガーデンパス効果を回避することができるのか、もしくは、英語を母語として獲得段階の子供のようにそれらを利用することができないのかを明らかにすることを目的とした。自己ペース読文実験の結果、中上級程度の日本人英語学習者は、漸進的に文処理を行い、習熟度が高い人ほどその傾向は強かった。また、英語母語話者とは異なり、意味的整合性や動詞の下位範疇化情報を用いて、即時的に一時的曖昧性の解消を行うことができないことが明らかとなった。しかし、それらの情報が、曖昧性の解消を行う語の出現後、誤分析からの回復を促進し、再分析のコストは減少することが示唆された。

[C-4]

日本人学習者による英語 filler-gap 依存関係の処理

—自己ペース読文実験による検討—

峰見 一輝, 津村 早紀, 矢野 雅貴

英語の目的語関係節は、関係節内の動詞までを読んだ時点では、関係節内の目的語位置に空所 (gap) があることは確定しない。それにもかかわらず、多くの先行研究が、英語母語話者は、遅くとも動詞を読んだ時点で、動詞の目的語位置に gap を想定している (漸次的処理) ことを示している。さらに、Omaki et al. (2015)は、英語母語話者が、関係節内の動詞を読む前から、既に目的語位置に gap を予測している (予測的処理) と述べている。本研究では、英語の関係節の処理に関して、日本人学習者と英語母語話者が同様の処理を行なっているかどうかを、2つの自己ペース読文実験により検証した (日本人学生 28名, 英語習熟度 中上級程度)。実験の結果、日本人学習者が英語の関係節を漸次的に処理していることを示す証拠は得られたが、予測的に処理していることを示す証拠は得られなかった。この結果は、日本人学習者と英語母語話者の filler-gap 依存関係の処理に違いがあることを示唆している。

[C-5]

日本語を母語とする子供の条件文における部分否定の解釈

杉浦 航, 島田 博行

Sugawara and Wexler (2014)によれば、日本語を母語とする子供が(1) に対して $neg > all$ の解釈を与えた割合は 5%にとどまり、(1) に対して大人と同様な解釈を与えることが観察されている。

(1) リスさんみんながどんぐりを拾わなかった ($all > neg, *neg > all$)

(Sugawara & Wexler 2014)

この観察は、Musolino (1998)などで報告されている Observation of Isomorphism (以下 OI) と合致する結果であり、大人の文法で *inverse scope* の解釈が許される文において子供が *inverse scope* にアクセスできるかは明らかになっていない。(1)のような文では *inverse scope* の解釈は大人でも許されないが、(2)のような条件節では *inverse scope* の解釈が可能になると観察されている。

(2) 全員がそのテストを受けなかったら、また来月テストをする。 ($all > neg, \overset{OK}{neg} > all$)

(Saito 2006)

もし OI が日本語の条件節にも当てはまるとすれば、このような条件節でも *inverse scope* に容易にはアクセスできないことが期待される。本研究では、日本語を母語とする子供が、*inverse scope* が可能となる条件節においては大人と同様に *inverse scope* にアクセスできることが示された。

[C-6]

依頼行為におけるアメリカ英語での Could・Would と会話の背景の関わり

テーボルト ジョセフ ロバート

慣用的間接依頼表現である Could/Would は仮定法を表すため、if節がない限り「文字通り」の意味（能力・予測）が取れない。そうした要因もあり、間接度で使い分けが行われ、Can/Will より丁寧であるとされている。しかし、現代アメリカ英語大型コーパス『COCA』で調査した結果、真の使い分け基準は法性であることが裏付けられた。Could/Would はそれぞれ「依頼力」と、会話の背景から法性的基盤を決定づけるための規定とで二分できると考えられる。

Could は聞き手にとっての状況に関する会話の背景を法性基盤にし、Would は話し手の依頼動機に対する聞き手の「意志」に関する会話の背景を法性基盤にする。そこで、依頼力を強化させる Please を加えると法性基盤の顕著度が下がる。本研究ではこの仮説を検証すべく計 40 のスピーチ・イベントを分析した。各依頼イベントの法性基盤を明記し、Please の有無が発話に及ぼす効果を調べた。Could/Would の二分性と語用論的な推論を通して様々な発話効果が説明できることが分かった。

[C-7]

多義動詞「つながる」の意味分析

—「因果関係用法」に注目した通時変化の考察—

辛 蒙

本論では「金の供給量の減少は金の価格の上昇につながる」のように、「ある事柄の影響である結果が出る」を意味する「つながる」の用法を因果関係用法とする。その用法の発生時期と派生関係を明らかにすることを目的として考察を行い、結果は以下の3点である。

①「つながる」の意味用法は9つに分類でき、因果関係用法と比較的近い用法は【事柄同士の相互関係】である。【事柄同士の相互関係】から【因果関係】へ向かい、時間的要素が加わったものと思われる。

②『青空文庫』、『神戸大学新聞記事文庫』、『国会会議録（予算委員会）』を利用し、通時変化を考察したところ、1931年に因果関係用法の早い用例が見られ、1970年代以来活発に使われていることが分かった。

③BCCWJでの調査では、現代日本語では他の意味用法と比べて因果関係用法の方が活発に使われていることが分かった。

[D-1]

短縮語の形成方法に観察される世代差について

文 昶允

本研究では、複合構造を持つ外来語からなる短縮語を取り上げ、その形成方法に見られる世代差の実態について明らかにする。

複合外来語由来の短縮語には、構成素に長音が含まれているものがある。この種の短縮語には、①各構成素から初頭 2 拍ずつを取るタイプ（ワーキング・ホリデー）に加え、②長音の代わりにその直後の自立拍を組み込むことによって全体が 4 拍になるタイプ（ワールド・チケット）と、③短縮語全体が 3 拍になるタイプ（ソーシャル・ゲーム）がある。本研究では、②と③のタイプの現れ方に世代差があることを捉えるべく、無意味語を用いた語形成実験を行った。その結果、①のタイプが無標形であることが明らかになった。また、短縮形に長音を組み込まないタイプのうち、4 拍形は高年層に支持されやすい一方、3 拍形は若年層に支持されるという顕著な傾向が認められた。この結果は、短縮語形成の方略が世代間で変化しつつあることを示唆している。

[D-2]

語形成に見られる機能的動機付け
— 指定的特徴を持つ複合語を事例として —

五十嵐 啓太, 納谷 亮平

複合語の中には語と句のいずれの性質も備えた事例が観察される。こうした事例は、とりわけ語形成部門に関する理論的問題を扱う上で重要な役割を果たしてきた (cf. Shibatani and Kageyama (1988))。一方で、こうした純粋な語としての性質を示さない複合語が存在する理由は積極的に論じられてこなかった。そこで、本発表では、機能的動機付けという観点から、語と句のいずれの性質も備えた複合語が生じる理由に迫りたい。対象とする現象は、「まつり-つくば」や「宅急便-コンパクト」のような複合語である。本発表では、これらを *postsyntactic compound* の一種であると主張し、この種の複合語の形成は、通常の語彙的複合語では実現が困難な指定的解釈を保証するという目的、言い換えれば機能的動機に起因していることを論証する。本分析は、統語部門での語形成が、演繹的体系外からの要請によってなされることを示唆するものである。

[D-3]

北海道方言「ラサル」の形態統語論

大野 公裕

北海道方言に見られるいわゆる自発の助動詞「ラサル (-rasar)」は、「御飯が炊かさった (=御飯が炊けた)」のような例に対しては、他動詞を自動詞化する「逆使役化接辞」としてしばしば分析されてきたが、この分析は「つい、あいつの悪口を言わさった (=言ってしまった)」のようなもう一方の用法 (偶発行為) と統一的な説明ができないなどの問題があった。

本発表では、「ラサル」は同じ北海道方言に見られる使役動詞「ラセ (-rase)」と使役交替のペアをなす動詞であることを論じる。つまり、「ラサル」は「ラセ」(あるいは標準語の「サセ)」と同じようにある種の動詞句補部をとるが、それ自身は外項を持たず格付与能力のない非対格動詞として分析できることを示す。また、ラサル構文の上記 2 つの主要な用法については、「ラサル」のとり動詞句補部が再構成 (restructuring) を受けるかどうかによって統語的に異なる構造が派生されることから統一的に説明できることを示す。

[D-4]

南琉球宮古語池間 (西原) 方言における焦点助詞 *du* と述語動詞モダリティの相互関係

林 由華

琉球諸語に広くみられる焦点助詞 *du* は、日本古典語におけるゾ-連体形に対応するとされる係り結び現象の係りとなる要素である。*du* による係り結びは、ある係り助詞がひとつの動詞活用形を結びとして選ぶような典型的係り結びではなく、文中に *du* が出現しても結びとして複数の活用形が現れることが最近報告されている。この傾向が顕著に観察されやすい方言群は、従来、「係り結びの係りの力が弱まっている」「係り結びがなくなっている」とされており、宮古語池間方言もそこに含まれていた。本発表では、そのような池間方言においても、焦点助詞 (係り助詞) *du* が特定のモダリティ特性をもつ活用形を述語動詞 (結び) としてとっていることを示し、その現象を基に焦点助詞 *du* のモダリティ上の性質や池間方言における文のモダリティ構造について考察する。

[D-5]

ケドとノダの共起関係 ―ケドとノダケドの相違点について―

池 玫京

日本語の接続助詞ケドはノダと共起できるが、両形式の共起関係は不規則的に見える。本発表ではケドの各用法におけるケドとノダの共起について分析し、ケドとノダケドの違いと、文の容認度が変わる理由を探ってみる。まず、食い違った結果が現れる逆接の関係において、ノダは文法性を左右するものではない。一方、発話行為の注釈としてケド節を用いる場合は、ノダの有無で文法性の判断が変わる。野田(1995)は聞き手の認識状態を基準に説明しているが、これは非常に可変的であることが動詞「思う」と希望を表す「タイ」の考察で明らかになった。さらに、ある対象や事態の提示と説明をする際には、前後件の内容に対立があればケド、対立がなければノダケドが主に使われた。つまり、前後件の異質性、対立の有無は、ケドとノダの共起を決める要因なのである。以上、ケドとノダの共起は用法によって容認度が様々で、聞き手の認識と対立の有無が重要であることが分かった。

[D-6]

補助動詞「ておく」＋デオンティックモダリティにおける事態の未完了性

陸田 利光

本研究では、補助動詞「ておく」の機能に焦点をあて、本来は未実現の事態を対象とするデオンティックモダリティである「べきだ」「なくてはいけない」「ものだ」等の表現が「ておく」と結びつくことで当該する動作が未完了を表すようになり、事態が未実現として判断されることを検証する。

補助動詞「ておく」には行為の結果状態を維持させる用法がある。動詞に「ておく」が付加されることで、当該する行為が一定期間維持されることを表すため、発話時点ではその行為は完了していないことになり、事態が未実現の際に用いられるデオンティックモダリティとの共起が可能になるのである。

この結果状態の維持がもたらす行為の未完了性とデオンティックモダリティとの関係についてはこれまであまり考察されていないようであるが、「ておく」が表す行為の未完了性の視点から、既実現事態におけるデオンティックモダリティの使用を考察する。

[D-7]

近代日本語における依存構文の発達
— 間接疑問構文の客観化を契機として —

志波 彩子

「彼女が幸せになれるかは誰と結婚するかで決まる」のような[A-スルカハ B-スルカデ/ニ依存動詞]という構造形式で「A の値は B の値（条件）に依存する」ことを表す依存構文は、近代の小説テキストにはほとんど用例がない。一方、近世では未だ「分かる、知っている」等の既決述語では用いられていなかった間接疑問構文が、近代の小説テキストでは[V-スレバ V-スルカガ分カル]のように条件節を伴って安定して用いられている。このことから、本研究は、既決述語の間接疑問構文が依存構文発生の契機となり、依存構文が定着した可能性を『太陽』を中心とした近代語コーパスを用いて述べる。さらに、既決述語の間接疑問構文の疑問節と依存構文の疑問節は話し手の疑問ではなく一般的な不定命題を表す点で共通し、「節-か」を持つ構文の「客観化」によるものであること、また、両構文の意味は佐藤(1998)の「計算的推論」の一種でもあることを述べる。

[E-1]

日本語存在表現における場所標示格（所格）の先行性と
脳内視覚認知機構との関係仮説

廉田 浩

日本語存在表現では、「(場所)ニ (主語)ガ アル」のように所格が主語の前に来ること（所格先行）が多い。しかし別の動詞では、「(主語)ガ (場所)ニ 来タ」のように主語が前に来る方（主語先行）が普通である。どのような動詞で、どのような場合に、所格が主語に先行するのかという使用実態を、コーパス BCCWJ を使ってしらべた。従来、この所格先行性は、ある種の「場所の取り立て」の結果という説明がなされて来ている。しかし、使用実態調査結果の頻度分布には、上記の取り立て統語現象としては説明し切れない、主語の動・静や空間情報に対する顕著な相関性があり、視覚認知機構の特徴との類似性があることが分る。そこで、発話生成時の統語過程と視覚認知機構での認知過程とが並行しているのではないかという仮説を設け、分析を行ったところ、各場合の所格先行特性をうまく説明できることが分かった。抽象事象の存在表現や他言語での類似現象についても検討した。

[E-2]

脳波計測による語用論的推論の時系列と心の理論との関わりの検討

時本 真吾, 時本 楠緒子, 宮岡 弥生

本研究は、間接的発話の意図理解のために発動される推論の形式を、文脈を変化させることで操作し、語用論的推論の時間特性ならびに心の理論との関わりを脳波計測実験によって考察した。実験の結果、演繹的推論またはアブダクションを伴う談話のそれぞれに頭皮上中央から頭頂・後頭にかけて陰性の事象関連電位(ERP)が観察されたが、アブダクション談話が惹起する陰性成分の方が振幅が大きく、持続時間が長かった。行動指標上、両談話に差は認められなかったので、ERPの差異は処理負荷のみには還元できない。また両談話について脳波の発生源推定を行ったところ、演繹的談話については後帯状皮質が、アブダクション談話については左半球の島皮質が主発生源であった。正中線内側部は心の理論に関わる領域で、演繹的推論と心の理論との関わりが示唆されるが、アブダクション談話の様な間接的発話の理解については言語固有のメカニズムがある可能性がある。

[E-3]

感嘆文における否定の島再考

本多 正敏, 大久保 龍寛

英語の感嘆文において、程度の甚だしさを表す *wh* 句が否定辞を越えて A-bar 移動できないことが指摘されている (e.g. 近藤 (1995))。このような現象は否定の島と呼ばれ、A-bar 移動に伴う量化を示す証拠の一つと考えられている。一方、日本語は In-situ 言語であるため、感嘆文の派生において非頭在的 A-bar 移動に伴う量化が起きるかどうかの一つの大きな研究課題となっている (cf. Oda (2005))。本発表では、日本語の感嘆文における否定の島の効果を考察し、その派生には非頭在的 A-bar 移動が関与すると議論する。具体的には、感嘆句が、副詞表現、述語名詞句、及び不定解釈を伴う名詞句に付加する場合、否定の島の効果が生じることを指摘する。そして、Rizzi (1997) 以降発展を見せている Cartography の枠組みに基づく分析を提案し、上述の統語環境における否定の島の効果に対して説明を与える。

[E-4]

動詞句削除：2種類の be に基づく分析

木村 宣美

動詞句削除に関して、being の削除が義務的で、be と been は随意的であるとの指摘がある。(Sag 1976, Akmajian, Steele and Wasow 1979) このような be の削除可能性に対して、i) Aelbrecht and Harwood 2015 では、機能範疇の補部に vP を仮定し、ellipsis site の the progressive aspectual layer にある being のみが義務的に削除される、ii) Bošković 2014 では、be 転移を仮定し、動詞句領域を支配する一番上位でフェイズの AspectP とその補部である VP₂ のみ削除されるとの分析が提案されている。このように、従来の分析では、be は動詞句内から、be 転移の適用により、動詞句外に移動するとの主張がなされている。本発表の目的は、be 転移に基づく分析を批判的に検証し、動詞句削除に対して、2種類の be [助動詞の stative be と動詞の dynamic be] (Kaga 1985, Williams 1984) に基づく分析を提案することにある。動詞句前置、知覚動詞・使役動詞補文等における be の分布及びその語彙的特性から、stative be と been が助動詞で、dynamic be と being が動詞であることを明らかにし、動詞である dynamic be と being のみが動詞句削除によって削除されると主張する。

[E-5]

underestimate とは言っても underheat とは言わないのはなぜか

—動詞接頭辞 over-と under-の対比から—

野中 大輔, 堀内 ふみ野

接頭辞 over-/under-が付与された動詞 (over-V/under-V) は、行為の過剰・過少を表す用法を持つ。その中には、over-V/under-V のどちらも成立する場合 (e.g. overestimate / underestimate) と、over-V が成立しても under-V が成立しづらい場合 (e.g. overheat / *^{/?}underheat) が存在する。本発表では、後者の例で under-V が成立しづらい要因を行為に内在するスケール性の観点から分析し、行為の過剰性と過少性の捉え方の違いが over-V/under-V の成立可否に関わっていることを論じる。また、under-V としては成立しづらくとも過去分詞の形では表現可能な例 (e.g. undercooked) が存在することを指摘し、under-V-ed という複合的な型に一定の生産性が見られることを示す。

[E-6]

英語命令文における主語の随意性について

鈴木 智也, 小町 将之

本発表では、ラベル付けアルゴリズム (Chomsky, 2015)の枠組みから、英語命令文における主語の随意性及びその生起位置について論じる。英語をはじめとする EPP 言語において、T が TP 指定部の顕在的な主語と一致していなければ、T とその補部 α からなる統語要素 {T, α }にラベル付けすることができず、その派生は崩壊すると考えられる。しかし、命令文においては、T が顕在的な主語と一致していなくても、{T, α }にラベルを付けることができ、その結果、命令文の主語は平叙文と異なる位置を占めると提案する。T と一致する必要がない命令文の主語は、元位置である v P 指定部に留まる、もしくは削除されることになる。この分析によって得られる英語命令文の構造は、否定命令文の類型論的一般化 (Han, 2001)と整合的であるだけでなく、主語の位置による副詞の生起位置の違いについても適切な予測を与える。

[E-7]

多重 wh 疑問文のペアリスト解釈とスルーシング

水野 輝之, アーリーワイン マイケル芳貴

多重 wh 疑問文が埋め込まれた構造における対比スルーシング (contrast sluicing) とそのペアリスト解釈の観察を基に、対比スルーシングの認可に関与する意味的制約の解明を試みる。本発表では、対比スルーシング認可に決定的な役割を果たす認可条件として「相補的疑問文 (complementary questions; CQ)」という概念が導入される。まず通常の対比スルーシングにおいて、削除される節が平叙文・wh 疑問文のどちらの場合においても、CQ を満たさないケースが正しく排除されることを示す。次に、多重 wh 疑問文を含む対比スルーシングに CQ を用いた認可条件が応用される。先行文内における correlate の構造的な位置がペアリスト解釈の有無に決定的な差をもたらすことが観察された後、その差が多重 wh 句によって作られる family of questions の構造と CQ の相互作用によって引き起こされることを示す。これらの結果は、スルーシングの認可が統語的条件よりも意味的条件と密接に結びついていることを支持する根拠となる。

[F-1]

インドネシア語・マレー語における di-構文（いわゆる受動文）の機能：
標準／口語インドネシア語とスンバワ・マレーの eventive 節からの考察

塩原 朝子

標準インドネシア語文法では受動態と呼ばれている di-形動詞の構文は、統語的には典型的な受動態的特徴を示すが、談話的には受動態らしくない特徴を一部の変種で示すことで知られる。本研究ではジャカルタにおけるインドネシア語の標準的変種、口語的変種、およびスンバワ島のマレー語を調査し、di-構文の談話的特徴の違いを明らかにした：ジャカルタの話者による標準的変種では動作主の topicality が極端に低い場合のみ用いられるという典型的な受動文の特徴を示すのに対して、スンバワ・マレーにおいては、動作主の topicality が高く、動作の対象の topicality が低い場合（例えば新規に談話に導入された場合）にも現れるという非典型的な用法がみられた。一方、ジャカルタの口語的変種では動作の対象の topicality が高ければ、動作主の topicality に関わりなく用いられるという中間的特徴がみられた。

[F-2]

受動文の接語重複分析再考：古典マレー語の di-受動文

野元 裕樹

Baker et al. (1989)は、受動文には接語重複が関与すると提案した。具体的には、-en を by 句により重複される接語と分析した。本研究では、古典マレー語の di-受動文が実際に接語重複を伴うことを 3 つのテキストの分析に基づいて示す。di-受動文は動作主の標示方法により 4 つに分類できる。このうち、ハイブリッド型は、動詞直後の 3 人称接語代名詞=nya が oleh 前置詞句により重複されているような、接語重複を伴っていると分析できる。ハイブリッド型は、ロマンス諸語などに見られる直接目的語接語重複と以下の特徴を共有する：[1]重複の随意性、[2]専用の前置詞の関与、[3]高い指示性（他の型と違い、動作主が定または特定である）、[4]接語と重複要素にかかる同一節条件。受動文が動作主の接語重複を許すことは、一般言語学的には、受動文動作主がレキシコンと統語部門の両方で削除されずに存在していることを示唆する。

[F-3]

ポポロカ語テマラカユカ方言における2種の名詞複合

中本 舜

ポポロカ語テマラカユカ方言は、形態音韻論・統語論・意味論的基準により、語形成に用いられる2種の名詞複合、「生産的複合」と「語彙的複合」を区別する。

形態音韻論的には、前部要素が独自の音韻論的ドメインをなすことを示す形態音韻論的規則や音素配列論的制約がある場合生産的複合である。統語論的には、従属部に動詞句を含む句が現れる場合生産的複合である。意味論的には、動物や人間を表す前部要素が必ず生産的複合により複合される。

この2種の複合の区別は、語形成研究やポポロカ語学に以下の意義を持つ。まず、語形成に用いられる生産的複合が他の言語が関係化によって表す表現の一部を表せる点で語形成と統語論のインターフェイスにおける例を提供する。また、Veerman-Leichsenring (2004) がポポロカ祖語に再建した名詞類別詞はこの言語において一貫した形態論的カテゴリーをなさず、本論は再建への反論となる。

[F-4]

カムサ語の動詞における人称標示 ―肯定形の場合―

蝦名 大助

カムサ語 (Kamsá) はコロンビア共和国シブンドイ (Sibundoy) で話される系統不明の言語である。カムサ語では、主語と目的語の人称と数が、動詞に付く接頭辞によって義務的に標示される。また、二種類のアスペクトが義務的に区別される。先行研究では、アスペクト、主語の人称、目的語の人称はそれぞれ独立した接頭辞によって標示されると分析されているが、本発表ではこれらは融合した1つの形態として分析するほうが適切であることを示す。また、カムサ語には1人称に包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) の区別がある。先行研究では、人称接頭辞パラダイムにおいて包括形と除外形の区別が欠けている箇所があるが、本発表では完全なパラダイムを提示する。さらに、人称接頭辞の異形態が先行研究では整理されていないが、本発表では可能な限り整理して示す。

[F-5]

ヒッタイト語の使役機能を持つ接辞-*nu*-と通時的変化

大亦 菜々恵

ヒッタイト語には形容詞や動詞語基につく *-nu-* という動詞派生接辞が存在し、使役を標示するとされてきた。しかし語基が他動詞の場合は語基と *-nu-* 派生語の意味に違いが見られないなど、*-nu-* 接辞の機能は判然とせず、先行研究では未だ定説がない。本発表では他動詞語基についた場合を中心に *-nu-* 派生接辞の機能を検討し、この接辞が意味の違いなく使用されている例の存在を検証する。また、意味の違いがないとき、その語基が自動詞用法も持つことを明らかにし、通時的分析から、古期で自他同形であった動詞に、中期以降他動詞であることを明示するために *-nu-* をつけるようになったと主張する。類型論的研究から自他交替はアラインメントと密接に関連していると考えられているが、古期で自他同形であった動詞対が中期以降使役型に変化するという自他交替パターンの変化は、ヒッタイト語の動詞組織の通時的変化を反映していると考えられる。

[F-6]

古アイルランド語の分裂文における鼻音化関係活用について

内山 祐里奈

本発表では、古アイルランド語の鼻音化関係活用と呼ばれる現象の起源について扱う。主格名詞句以外の関係節・分裂文、副詞節、引用節などで使われるこの鼻音化関係活用は、起源について通説と呼べるものがなく、活用する関係小辞の対格語尾由来説 (Ahlqvist 1983)、関係小辞以外の語による鼻音化由来説 (Pedersen 1898) などの間で論争がある。

本研究では、時代区分の異なる 3 つの散文資料を使用し、分裂文の従属節において鼻音化関係活用が使われやすい環境と時代ごとの使用率の変化を調べた。その結果、目的語分裂文より副詞的に使われた形容詞句・副詞句分裂文のほうが高い鼻音化率を示すこと、従来は鼻音化関係活用が出現しないとされてきた主語分裂文でも出現する例があることが分かった。このデータから対格語尾起源説に反論し、元は副詞節で使われていたが対格の関係節に転用されたという仮説を提案する。また、副詞的対格からの類推を転用の動機として示す。

[F-7]

アイルランド語の‘be done’構文と動作主人称

山田 怜央

アイルランド語には‘be done’と表わされるような構文が存在する。項の昇格・降格を伴うこの構文は伝統的に‘Perfective Passive’と呼ばれているが、自動詞にも適用可能であるなど、受動らしからぬ特徴も持つ。それゆえ、この構文を完了相における分裂「能格性」であるとする分析もあり、そちらの方が正当性を有するようと思われる。

そこで本発表ではこの構文が持つ「能格性」をより明らかにするため、コーパス調査をおこなった。

この‘be done’構文が受動構文であるならば、1人称の動作主の出現率は低くなることが予想される。しかし今回の調査では、‘be done’構文が取っていた動作主のうち、30%弱もの数が一人称であった。この数値は、通常の構文における一人称動作主の出現頻度から大きく逸脱するものではない。

最後にこの論の裏付けとして、典型的な受動構文を持つフランス語で調査してみたところ、受動構文における一人称動作主の出現率は1%にも満たなかった。

[G-1]

韓国語釜山方言の接尾辞による派生語形成のアクセント

姜 英淑

本発表は、韓国語釜山（プサン）方言の接尾辞による派生語形成のアクセントを明らかにすることが目的である。接尾辞が語基と結合する時は、基本的には複合名詞のアクセント規則が働くが、語基が1音節の用言語幹の場合は、接尾辞が子音始まりなのか母音始まりなのかによって異なるアクセント特徴を見せる。この特徴は、用言の活用時のアクセント特徴と同様であり、接尾辞による派生語形成には複合名詞のアクセント規則や用言活用時のアクセント特徴が深く関わっていることを論じる。

[G-2]

韓国語光州方言の外来語アクセント

李文淑

光州方言のアクセントについてはいくつか報告されているが、光州方言の外来語アクセントに関する研究はない。本発表では、1音節語、2音節語、3音節語を対象にして、1) 頭子音、2) 音節量、3) 末尾子音、4) 挿入母音、5) 1連続の5つの要因とアクセントの関連性を考察した。また、当方言の固有語と外来語アクセントの分布を比較してみると、固有語でもっとも好まれるアクセントパターンはLHであるのに対し、外来語で好まれるアクセントパターンは1音節語・2音節語ではHL(H:Lを含む)、3音節語は頭子音の条件で分かれ、平音・共鳴音の場合はLH、s、h、濃音・激音の場合はHHとなっていることが分かった。特に、当方言のdefault accentであるLHが1音節語では全く観察されないこと、2音節語でも現れる頻度が低い点は注目できる。また、音節量では重軽はHL、軽重はLHとなる傾向が見られ、音節量によって一定のアクセントパターンを示すことが確認できた。

[G-3]

東京方言における無標音調の実現パターンと句頭のピッチ上昇の要因

荒籾 善成

東京方言における句頭のピッチ上昇に関して上野(2009)は、文や句の途中に上昇のないのが無標の音調で、上昇は文の発話状況や前提、一般常識をも含む「語用論的意味」(特別の意味・意味の強化)によって引き起こされると述べているが、本発表はこれを支持し、その例証を試みる。上昇の要因を「右枝分かれ構造」や「非限定的修飾」に求める説もあるが、モノログや字面読み、客観描写(無焦点)、命題化(文脈排除)、タイトルといった、語用論的意味が加わっていないか、または排除された状況(用例は主にテレビドラマの台詞)では、「右枝分かれ構造」や「非限定的修飾」であっても内部に上昇(句切り)のない無標音調の句が形成され得る。実は「右枝分かれ構造」や「非限定的修飾」は聞き手の理解への配慮に関わる考慮条件に過ぎず、この種の配慮も含め、特定の要素の強調につながるあらゆる事情(=語用論的意味)が上昇の要因であると見るべきである。

[G-4]

韻律と情報構造, 介入効果
—佐賀方言と東京方言の対照より—

日高 俊夫

東京方言においては、否定極性表現、選言要素、焦点化マーカー、ある種の量化表現は、表層で wh 要素を構成素統御する位置に生起できない(wh 要素を文頭に移動させると容認性が改善する)。この現象(介入効果)については、Hoji (1985) 以来、統語 (Hagstrom (1998)等)、意味 (Beck (2006) 等)、韻律と情報構造(Tomioka (2007), Eilam (2009) 等)の面から説明が試みられてきた。本発表では、佐賀方言で介入効果が働かない(wh 要素が文頭でも容認性は変わらない)ことを指摘し、アムハラ語 (Eilam, 2009) における韻律特性を考え合わせた結果、佐賀方言における振る舞いを説明するには、Tomioka (2007) らの韻律と情報構造の対応に基づく説明が妥当であることを示す。具体的には、佐賀方言では wh 要素が韻律上卓立しないため、wh 要素を含む文でも発話全体が1つの中間句にまとまり、韻律上、介入効果を引き起こす要素が焦点的に、wh 句を含む残りの部分が tail 的に機能できることが要因であることを述べる。

[G-5]

琉球沖永良部国頭方言の疑問文イントネーション

横山 (徳永) 晶子

木部 (2010) によると日本語諸方言の疑問文イントネーションは、以下の 5 つに類型化できる。(a) 上昇調：疑問を表す語形式の有無に関わらず、文末が上昇調。(b) 下降調 1：疑問を表す語形式の有無に関わらず、文末が下降調。(c) 下降調 2：疑問を表す語形式が文中に必ず現れ、文末が下降調。(d) 相補タイプ：疑問を表す語形式が文中にあれば下降調、なければ上昇調。(e) 句末漸上昇：疑問詞から句末まで緩やかに上昇。国頭方言は(d) 相補タイプに類似するが、完全には当てはまらない。国頭方言の疑問イントネーションを記述するためには、木部 (2010) で提案される①基本の文末音調、②疑問を表す語形式の有無という指標に加え、③述語のアクセント型、④平叙文と疑問文の弁別性、という新たな指標が必要となる。国頭方言の疑問文は基本的に下降調だが、述語が特定のアクセント型 (d 型) を持ち、疑問を表す語形式を伴わない文型のみ、平叙文との弁別性を保つ為に上昇調となる。

[G-6]

複合名詞アクセントに見る福井県あわら市北潟方言と高知市方言の対応関係

松倉 昂平

福井県あわら市北潟方言は、語の長さにかかわらず3種類のアクセント型（A型、B型、C型）が対立する「三型アクセント」を有する。本発表では、本方言の前部2拍+後部3拍複合名詞に働く複合語アクセント規則を分析し、その諸規則に見られる「中央式アクセント」を有する高知市方言との歴史的対応関係を示す。

北潟方言の複合名詞のアクセント型は、基本的に、前部要素と後部要素両方の性質を参照して決定されるが、全体的な傾向としては、前部要素の型と一致する例が多い（全調査項目の64%）。これは高知市方言におけるいわゆる「式保存の法則」と対応する。また、後部要素との相関としては「後部要素がB型であれば複合名詞全体でB型にはなりにくい」傾向がある。これは高知市方言における「HLL型後部要素の核保存」と対応するものと考えられる。これらの密接な対応関係は、北潟方言の三型アクセントと中央式アクセントの系統上の近縁性を示唆する。

[G-7]

外来語における双方向の有声性変異

西村 康平

本研究では、日本語の外来語における阻害音の有声性変異が無声化と有声化の双方向に起こることを指摘し、日本語の弁別的有声性指定においてその共起制限を原因とする混乱が生じていることを主張する。外来語に含まれる阻害音の有声性変異は、問題となる阻害音とは別に有声阻害音が存在する場合ならば、無声化（例：バドミントン～バトミントン）と有声化（例：バリケード～バリゲード）の両方が観察される。こうした双方向の変異は、単純な有標構造の回避という説明では不十分である。この現象は、和語や漢語において有効な弁別的有声性指定の共起制限によって引き起こされる、指定における混乱が原因である。外来語では和語や漢語ほど共起制限の効力が強くはないため、弁別的有声性指定の数に制限は無い。しかし、共起制限の影響によって2つ目以降の指定は曖昧になり、それが結果として双方向の有声性変異という現象を生み出しているのである。

[H-1]

ジンポー語における人称階層に基づく動詞の一致

倉部 慶太

本発表では、ジンポー語 (ビルマ：シナ・チベット語族) の動詞の一致は文法関係ではなく人称階層を初めとする複数の階層に基づくことを報告する。これまでジンポー語の動詞一致に関して文法関係が関与的であるとする説と人称階層が関与的であるとする説があった。本発表では発表者が独自に構築したコーパスを用いてジンポー語の動詞一致システムの包括的調査を行い、次の2点を主張する。(a) ジンポー語の動詞一致には人称階層、項の階層、数の階層が関与的である。特に、人称階層は中核項と動詞の一致、および、所有者項と動詞の一致の両方に関与する。(b) 多くの記述文法で述べられて来たこととは異なり、ジンポー語の動詞の一致において主語などの文法関係という概念は意味をなさない。

[H-2]

セデック語パラソ方言における語末 uy の交替

落合 いずみ

現代セデック語パラソ方言 (オーストロネシア語族アタヤル語群) には語根の最終音節にのみに現れる uy という二重母音がある。最終音節に uy を持つ語に対し一音節の接尾辞 (-i や -an など) を付加した際、次末音節に移動するこの uy は三つの形式— (A) uy, (B) ey, (C) ig —に交替する。A では uy のままで変化がない。B では最終音節の uy が次末音節で ey に交替する。A との比較から、最終音節の形式の起源は uy ではないとわかるが、かといって ey でもない。最終音節の e は直後に分節音を携えることができないという規則がある。通時的には ə が強勢位置である次末音節に当たる場合、e になる変化が起きた (そして最終音節では u に変わる)。そのため、B の起源として əy が建てられる。C はタロコ方言において未だ最終音節の ig が保存されている。結果、パラソ方言における最終音節の uy は三つの形式 (A) uy, (B) əy, (C) ig に由来する。

[H-3]

バスク語アスペイティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別

吉田 浩美

バスク語の記述文法で格語尾とされてきたものの中には、特定の格の NP を支配する後置詞として分析可能なものがある。本発表ではバスク語アスペイティア方言におけるそのような形態素を、従来どおり格語尾と捉えるべきか、後置詞と捉えるべきかをアクセントの面から考察した。バスク語アスペイティア方言ではその種の形態素は三つ認められるが、格語尾として捉えるといずれも 2 音節以上から成り、ある格の NP+後置詞と捉えると後置詞に相当する部分は 1 音節である。これらにおいては後置詞に見える部分（すなわち格語尾と見た場合は最終音節）にはいかなる場合もアクセントは置かれない。これは他の 2 音節以上の格語尾と同じ振る舞いである。一方、そのほかの後置詞は、あるものはなんらかの条件下で、あるものは無条件に、アクセントが置かれる。以上のことから、NP+後置詞と分析できそうな三つの形態素は、格語尾として捉えて差し支えないと考える。

[H-4]

アルタイ諸語、朝鮮語と日本語における動詞「ナル」の文法化の展開

山崎 雅人

アルタイ諸語、朝鮮語と日本語の動詞「ナル」の義務的(deontic)モダリティの例では、トルコ語 *Böyle bir şey olamaz*. 《こんなことあり得ない》日本語「ここで煙草を吸ってはならない」などの否定形が禁止や義務を表すが、両語では肯定形の助動詞化までは至っていない。モンゴル語と朝鮮語は修辞疑問形・否定形のみならず肯定形にも用いる。モンゴル語 *Энд тамих татаж болно*. 《ここで煙草が吸える》、朝鮮語 *여기서 담배를 피워됩니다*. 《ここで煙草が吸えます》。假定形をとる満洲語文語は、錫伯語に至って連用形+助動詞肯定形にも用いる。満洲語文語 *si kemuni geneci ombihe*, 《汝はなお行けたらうに》錫伯語 *araŋ gəl gizirəm om*. 《そうとも言える》。「ナル」が許容などの義務的モダリティ用法の文法化の新旧度は、(土(蒙, 土諸語(満>錫)朝)日)のように周圈論的分布となる。

[H-5]

ブリヤート語未来分詞の文末用法：分詞の「再名詞化」によるモダリティ表現

山越 康裕

モンゴル諸語のブリヤート語には未来分詞 V-xA が主節述語となる際にとる人称接語が 2 系列 (述語人称 =PRED/所有者人称 =POSS) ある。この V-xA=PRED と V-xA=POSS について、

- 1) V-xA=PRED が基本的な形式であり、V-xA=POSS は義務・推量のモダリティを表わすこと、
- 2) この差異が周辺言語に見られる定動詞 vs. 分詞 (動詞述語 vs. 名詞述語) に見られる差異と並行的であること、
- 3) この差異は V-xA=PRED が定動詞未来形のパラダイムの欠落を埋めた結果「定動詞化」し、V-xA が =POSS の接続によって「再名詞化」して生じたと推測されること、

を述べる。さらに、分詞主節述語用法と関連形式との機能的対立に関しては「分詞の動詞化による定動詞の特殊化」「分詞の動詞化に伴う、名詞化標識による再名詞化」「分詞を述語とする従属節の脱従属化」の三類型をたてることを提案する。

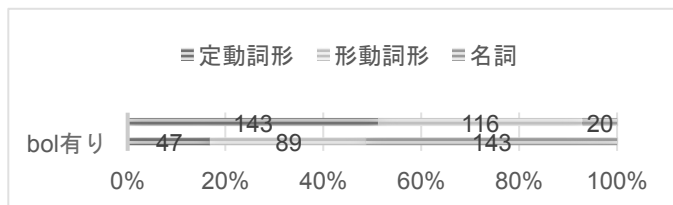
[H-6]

モンゴル語の係り結び

山田 洋平

モンゴル語の動詞の形動詞形は、本来は専ら連体修飾節や準体節の述語を成すものであったが、現代モンゴル語では主節の述語としても用いられるものがある。本研究では主題マーカー bol を係助詞に見立て、これがあるときに主文の述語が形動詞形で結ばれるという係り結びを成していることを明らかにする。

総語数約 883 万語のコーパスから bi=bol {1SG=TOP} 「私は」 279 例の述語形式を調べ、bol を含まない任意の例 279 例と比較したところ、次のグラフのような結果が得られた。



bol 無し、つまり普通の文においては定動詞形で結ばれる文が半数を占める。次いで形動詞形で結ばれる文も 40%以上を占め、bol の有無に関係なく出現数の多いことがわ

かる。bol 有りの文では名詞述語文が半数を占める。総数を見ると形動詞形の出現数は 116 から 89 と減じているが、動詞述語の中だけで見ると定動詞形の 2 倍ほど出現している。ここから bol と形動詞形のような名詞的な性質の述語の間に相関関係があることが分かる。

[H-7]

モンゴル語ハルハ方言の母音の長さ

植田 尚樹

モンゴル語ハルハ方言の第2音節以降には、音韻的な母音の長短の対立がなく、「音素的母音」のみが存在するとされる。そしてこの音素的母音は、第1音節の長母音よりも短母音に近い持続時間を持つことから、短い（無標の）母音であると言われている。しかし、この解釈には疑問が残る。第一に、音声産出実験および知覚実験を行ったところ、第2音節以降の音素的母音は、確かに第1音節の長母音よりは短いものの、第1音節の短母音ほど短くない。また、音素的母音を持つ接尾辞を人為的に第1音節に移動させた場合、接尾辞に含まれる音素的母音は、第1音節の短母音よりも長母音に近い長さを持つ。これらのことから、第2音節以降の音素的母音は、本来的には（つまりレキシコンに存在する音韻的な形式としては）短母音ではなく長母音であり、位置による影響で音声的に短く発音されると結論付けられる。

■ワークショップ（6月26日（日） 10:00－12:00）

[W-1]

日本語の空項：理論的変遷と今後の展望

企画・司会：坂本 祐太

本ワークショップは、日本語の空項に焦点を当てる。Kuroda (1965)の研究より、日本語の空項は生成文法理論の枠組みにおいて広く議論されてきたが、未だに統一的な見解は得られていない。具体的には、先行研究において空代名詞分析 (cf. Kuroda 1965, Hoji 1998, Kurafuji 1999, Tomioka 2003), 動詞残余型動詞句削除分析 (cf. Otani and Whitman 1991, Funakoshi to appear), 項省略分析 (cf. Oku 1998, Saito 2007, Takahashi 2008a, b, Sakamoto to appear)の3つが主に提案されており、それぞれの分析への証拠と問題点が蓄積されている。そこで、本ワークショップでは各分析の支持者による研究発表及び聴衆を含めた質疑応答を介し、今後の日本語の空項に関する理論研究に寄与することを目的とする。

[W-1-1]

序論

坂本 祐太

本ワークショップの目的の説明並びに先行研究の概観を行う。具体的には、「Kuroda (1965)の空代名詞分析以降、どのような経験的事実が日本語の空項に対して動詞残余型動詞句削除分析及び項省略分析の発展を促したのか」を説明する。

[W-1-2]

意味論的空代名詞分析

藏藤 健雄

Hoji (1998) と Tomioka (2003) は、日本語の空項（以降 *pro*）は基底生成され、不定／属性を表すという分析をしている。本発表では、この仮説を擁護する。具体的には、*pro* は文脈で卓立した属性または関係を表し、選択関数またはスコール関数により解釈される分析を提案する。これらの関数自体は変項で、任意の位置で存在閉包をうける。これにより、空項が関わる作用域の多様性が導かれる。さらに本アプローチでは、英語の明示的代名詞も日本語の空項と同様に扱える。まず、代名詞は *D* の主要部であり (cf. Elbourne 2005), その補部の *pro* が、日本語同様、文脈で卓立した属性または関係を指すと仮定する。さらに、

D 主要部の代名詞は唯一性の前提をともなう選択／スコール関数であると仮定すると、英語では必ず定解釈になることが導かれる。つまり、日本語と英語では *pro* の扱いは実質的に同じであり、項位置に必ず明示的 D 主要部が現れるか否かにより、定／不定の違いが導かれることになる。

[W-1-3]

動詞残余型動詞句削除分析

船越 健志

本発表では、日本語において空項を実現する操作の一つとして、動詞残余型動詞句削除 (verb-stranding VP ellipsis: VVPE) が許されていると主張する。まず、項省略や空代名詞といった VVPE 以外の方法では実現できない削除現象として付加詞脱落が関わったデータを検討する。その結果、付加詞脱落のデータを説明するためには VVPE の存在を仮定せざるを得ないと結論する。また、VVPE 分析は動詞上昇の存在を前提にしているが、日本語における動詞上昇は、Koizumi 2000 で提案された以降、その存在が疑問視されている操作である (Takano 2002, Fukui and Sakai 2003, Kobayashi 2016 など)。もし日本語において動詞上昇が許されていないのであれば、それを前提にした操作である VVPE の存在自体が疑わしいものになる。そこで、本発表の後半では日本語における動詞上昇の存在を支持する新たな経験的事実を提示する。具体的には、動詞句前置に関するデータから新しい一般化を導き出し、動詞上昇を仮定すれば、その一般化の簡潔な説明が可能であることを示す。

[W-1-4]

項省略分析

坂本 祐太

Oku (1998) 以降、日本語では項省略の操作が利用可能であると仮定されている。その根拠として、空項のスロッピー解釈及び空目的語構文での副詞句の解釈不可能性が挙げられてきた。しかし、これらの経験的根拠には先行研究において既に批判的な立場があり (Hoji 1998, Kurafuji 1999, Tomioka 2003, Funakoshi to appear), 当該の経験的根拠が必ずしも日本語における項省略操作を支持するとは言い難くなっている。そこで、本発表では日本語における項省略操作を支持する新たな経験的事実をイディオム表現・後方照応・空項からの抜き出しの可能性に基づき提示する。具体的には、①「Hankamer and Sag (1976) の表層照応と深層照応の区別に基づき、日本語の空項から特定の抜き出しが可能であることから全ての空項が空代名詞では分析できないと結論づける」、②「動詞残余型動詞句削除分析では説明

が困難であるイディオム表現に基づく経験的事実の提示に加え、過剰生成の問題を後方照応に基づくデータにより提示する」ことを目的とする。

[W-2]

理論言語学と認知神経科学：

言語理論はどうすれば脳科学実験によって確かめられるのか？

企画・司会：大関 洋平，コメンテータ：酒井 弘，小泉 政利，幕内 充

本ワークショップの趣旨は、「言語の計算理論・認知処理・脳機能レベルの研究者がコラボレーションすることの意義」を考える機会を提供することにある。この背景には、心理言語学や言語認知神経科学を含む「実験」的言語研究と、生成文法を含む「理論」的言語研究の相互理解・協力がまだ足りていないのでは無いか、という問題意識が存在する。例えば、理論的な言語学が、理論研究で提案されている仮説が実験的に探求されうる可能性に気付いていないことがある一方で、実験的な言語学が、理論研究を取り入れることによって言語に対する深い理解に基づいた実験をデザインできる可能性を見逃していることもありうる。そこで、この問題意識を共有している若手・ベテラン研究者が、ワークショップの参加者を巻き込みながら議論を行う過程で、理論・実験乖離の問題とコラボレーションの意義を検討する。

[W-2-1]

導入：言語の認知神経科学

酒井 弘

認知科学の開拓者である Marr (1982) は、人間の脳内で行われる高次認知機能を解明するため、(1)「計算 (computation)」レベル、(2)「手続 (algorithm)」レベル、(3)「実装 (implementation)」レベルを設定して研究する必要性を主張した。Sprouse & Lau (2013) によれば、(1)は言語の計算理論の研究、(2)は言語の認知処理の研究、(3)は言語の脳機能の研究に相当する。ただし、Marr の本来のアイデアに戻ると、これらのレベルは研究効率を高めるために提案されたものであり、異なる目標を有する自律した学問分野が設定された訳ではない。よって、「理論言語学 (計算理論の研究)」、「心理言語学 (認知処理の研究)」、「言語認知神経科学 (脳機能の研究)」という名称はミスリーディングであると言える。本発表では、3つのレベルを統合的に研究する意義を明確にする。

[W-2-2]

機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) と統語処理の神経基盤

太田 真理

機能的磁気共鳴画像法 (functional magnetic resonance imaging, fMRI) は、脳活動に伴う血流変化を非侵襲的に画像化する手法である。fMRI は非常に高い空間解像度を持つため、言語を対象とした認知神経科学の研究で広く用いられてきた。本発表では fMRI による脳活動計測について説明し、統語構造を処理する神経基盤を解明した発表者の fMRI 研究を紹介する。この研究では、複雑な統語構造を持つ文を読む際に、文法処理に関わる左下前頭回に局所的な脳活動が生じることを示した。さらにこの脳活動は、理論言語学が提案する「併合」操作の再帰的な適用回数によってのみ説明可能であり、語順や短期記憶の負荷では説明できないことを明らかにした。以上の例を通して、理論言語学の仮説を神経科学実験により検証する言語の認知神経科学が、将来的に人間固有の言語能力の解明につながる可能性について議論する。

[W-2-3]

脳波計 (EEG) と予測的統語処理の神経基盤

門馬 将太

心理言語学の目標の一つは、文を理解する際に、文法的知識と記憶や予測などの一般的な認知機能がどのようにからみ合って文の心的表象が構築されていくかを理解することにある。そのためには、文を読んでいる、または聞いている最中に、どのタイミングでどういった認知プロセスが起こっているかを観察する必要がある。本発表では、脳の活動を数ミリ秒ごとに記録することができる脳波計 (electroencephalograph, EEG) が、文を理解する際の複雑に絡み合う計算処理を時間的に分解し理解するのにどのように役立ってきたかを概観する。さらに、EEG を用いて言語的知識と言語処理の関係性を調べた一つ具体例として、文の予測的処理 (インプットが到着する前に起こる処理) が統語知識によってどのように制限されているかを調べた発表者の EEG の研究を紹介する。

[W-2-4]

脳磁計 (MEG) と形態統語処理の神経基盤

大関 洋平

脳磁計 (magnetoencephalography, MEG) は、脳活動に伴って微弱に発生する磁場を超伝

導センサーによって計測する手法であり、EEG と同様の時間解像度とある程度の空間解像度を併せ持つ。本発表では、2つ以上の語の組み合わせも2つ以上の形態素の組み合わせも、同様のタイミングでかつ左前側頭葉に局在していることを示唆する発表者の MEG の研究を紹介する。また、形式言語理論で提案されている有限状態文法と文脈自由文法の複雑さを、自然言語処理・機械学習に基づく計算モデルを用いて定量化し、形態論の階層的統語構造を問う実験にも言及する。最後に、これら2つの実験が、分散形態論を代表する形態統語理論における「統語的に複雑な句と形態的に複雑な語の間に質的な違いは無く、両者ともただ一つの計算システムによって構築される」とする反語彙主義の仮説に対して、どのようなインパクトを持つかについて議論する。

[W-3]

複他動詞構文 (ditransitive construction) とその周辺に存在する問題点

—Malchukov et al. (2010) の枠組みをもとにして—

企画・司会：山田 洋平，コメンテータ：風間 伸次郎

複他動詞構文は、複他動詞、A 項 (Agent), T 項 (Theme), R 項 (Recipient) からなる構文であると定義されている。「複他動詞構文」と言っても、構文の現れ方は言語によって様々である。本ワークショップでは系統や地域の異なる4言語 (モンゴル語, アイルランド語, ラワン語, フィジー語) をとりあげ、Malchukov et al. (2010) の理論的枠組みを使ってそれぞれの言語の複他動詞構文の特徴を記述することを目的とする。

本ワークショップではまず対象となる4言語について Malchukov et al. (2010) の提案する意味地図に敷いて R 項の現れや動詞の分布の様相を見る。次いで個別言語に関する報告として *secundative* 型の格配列を見せるラワン語に関する報告と、複他動詞構文を取り得る動詞の語彙的な問題を含むフィジー語に関する報告を行う。これらの報告を通じて言語の類型として複他動詞構文をいかに捉えるか議論する。

[W-3-1]

意味地図 (semantic map)

山田 洋平, 山田 怜央

本発表では Malchukov et al. (2010) の提案する意味地図を紹介する。そして本ワークショップで扱う4言語の複他動詞構文に現れる R 項が表しうる意味役割と動詞の意味タイプを

意味地図に示す。

Malchukov et al. による R 項の意味地図では, Recipient を中心に据え右上に Beneficiary (受益者), Possessor (所有者, 「彼の肩を叩いた」) という意味役割が伸び, 右下に Goal (着点), Location (位置) が伸びる。さらに三項動詞を取りうる Malefactive source (被害の起点, 「彼から金を盗った」) と patient (被動者, 「彼を棒でぶった」) が左に枝を据える。動詞の意味タイプによる意味地図では GIVE を中心に置き, ここから PUT / PUSH や SEND を含む「向格経路(path)」、BUILD / COOK (for sb) や SELL / PAY を含む「受益経路」、HIT / BEAT や FEED を含む「具格経路」が伸びている。

これらのマップを 4 つの言語に適用し, 言語ごとの特徴を見ながら Malchukov et al. による一般化の妥当性の検証も行う。また, 本発表では, Malchukov et al. が意味地図に示している項目以外についても, 複他動詞構造の可能性を提示する。

[W-3-2]

ラワン語の対格小辞の機能

大西 秀幸

ラワン語の対格小辞は他動詞構文の P 項と複他動詞構文の R 項を標示する。そのため Malchukov et al. (2010) の提示する配列タイプによると, secundative 型の格配列を見せる言語といえる。しかし, 個々の標示パターンをみると, 対格小辞が P 項を標示する場合は定性 (definiteness) を主な引き金とする DOM (Differential Object Marking) 的な特徴を見せる一方, R 項を標示するときは この DOM が見られず, 義務的に標示される。これは P 項を標示するときの対格小辞は名詞句が定であることを示すために用いられるのに対し, R 項を標示するときの対格小辞は他の項との差異化のために用いられるというように, 同形の格小辞が P 項につくか R 項につくかで機能が変わることに起因する。このような点を鑑みると, ラワン語は機能の違う 3 つの標識によって A, T, R を標示し分けており, 形式的には secundative 型アラインメント でも機能的な面からみると tripartite 型アラインメントとみることもできる。

[W-3-3]

フィジー語の複他動詞と投擲動詞

岡本 進

フィジー語の複他動詞構文では, T 項が単他動詞構文の P 項と同様の統語的振る舞いをする。すなわち, 述部の目的語標示との一致を示す。R 項は前置詞で標示される。これは

Malchukov et al. (2010) のいう *indirective* の配列である。

- (1) au soli-ø-a na isulu ki na gone
 1SG give-TR-3SG ART clothes to ART child
 「私は子供に服をやる」

一方、投げる動作を表す「投擲動詞」は、R 項が T 項と同様の統語的ふるまいをする。これは Malchukov et al. (2010) のいう *secundative* の配列のように思われる。目的語の名詞句が受け取ることを含意しないことから、R 項は *Recipient* ではなく *Goal* であるといえる。T 項は前置詞で標示される。

- (2) au viri-k-a na vale e na vatu
 1sg throw-TR-3sg art house with art stone
 「私は家に石を投げる」

以上のことより、フィジー語では R 項が *Recipient* のときは *indirective* 配列であるが、R 項が *Goal* のときは *secundative* 配列であると結論付ける。加えて、フィジー語の他動詞は *Recipient* を目的語にとることができないということが明らかとなった。